

か説清 ら 末 85 小

2007.4.1

林訳シェイクスピア冤罪事件(要旨)...樽本照雄 1
 林訳小説評価の最近樽本照雄 2
 樽本論文補遺3題沢本香子 7
 『漢訳ホームズ論集』樽本照雄10
 晩清小説作者掃描(拾)武 禧13
 清末小説から14 林紓が翻訳した作品に関する
 定説の強固さには、驚きます。戯曲を小説に変
 えたという例の有名な批判です。外国語を理解
 しなかった林紓のことだからそれくらいのデタ
 ラメはするだろう、という思い込みのようです。
 シェイクスピアのみならずイブセンについても
 林紓は冤罪だったのですね。次号に掲載を予囑

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

【速報】

林訳シェイクスピア冤罪事件(要旨)

樽本照雄

ひとこと言うと、つぎのようになる。

林訳シェイクスピアの底本は、イギリス人作家が小説化したものだ。

このイギリス人作家というのは、ラム姉弟ではない。だから、『シェイクスピア物語』をいっているのではない。ラム姉弟については、中国ですでに周知のこ

とである。今回の私の発見は、そのことではない。

もう少し補足してくりかえす。

シェイクスピア原作「ヘンリー4世」などの戯曲には、イギリス人作家が書きかえて小説にしたものが出版されている。林紓と陳家麟が漢訳した時、この小説化本を底本にしたのだ。

では、林訳の底本となった小説化本とは、なにか。それは、クイラー=クーチ『シェイクスピア歴史物語』(1898)である。

この新発見は、何を意味するか。簡単にのべよう。

林紓の翻訳は、致命的な欠陥を抱えている。なにしろ、シェイクスピアの戯曲を小説体に変えて翻訳しているのだ。林紓は戯曲と小説の区別もできないほど無知である。1924年、鄭振鐸が、シェイクスピア原作「ヘンリー4世」などの漢訳

名をあげて林訳を批判した。それ以来、林訳の欠陥として研究者に広く認められている定説である。定説だからこれを否定する研究者はいない。現在まで、例外のひとりも存在していない。

林紘がラム姉弟の『シェイクスピア物語』を漢訳して『吟辺燕語』と題した。シェイクスピアの名前だけを出して、ラム姉弟には触れなかった。これと同じことがほかのシェイクスピア原作の林訳にもあるのではないか。これが発想のもとである。ラム姉弟と同じことを別の作家が実行している可能性を考えたのだ。

シェイクスピアの戯曲を小説化した作品を調査した。多数出版されていることがわかる。試行錯誤の結果、林紘が底本としたクイラー＝クーチ版小説化本をつきとめた。

そうなると、林紘たちが勝手に戯曲を小説化したという批判は、成立しなくなる。これは立派な冤罪事件である。

小説化本を底本にした。だから、林紘が散文に翻訳するのは当然のことだ。林紘の認識不足でもないし、ましてや誤りでもない。戯曲と小説の区別がつかないというのは、あまりにも林紘を侮蔑した言辞だ。逆に、批判した鄭振鐸のほうが間違っていた。鄭の認識不足のほうが、これからは批判されることになるだろう。

いままでの林訳評価を根底からくつがえす発見であるということが出来る。

詳述した論文を『清末小説』第30号に掲載予定だ。ご期待下さい。 ☐

林 訳 小 説 評 価 の 最 近 ある不安な新展開

樽 本 照 雄

林紘が発表した多くの外国小説翻訳をどのように評価するのか。研究界では評価の方法にひとつの構造が、従来からある。枠組みといってもいい。

林訳小説評価の構造

評価の結論は、単純にふたつある。すなわち、林訳には欠陥があり、だからダメだ、という負の評価を下す。もうひとつは、欠陥があるにしても、当時の文芸界にはたした役割は小さくないから、よろしい、と正の評価になる。

林訳小説の欠陥とは何か。

林紘は外国語を理解しなかった。彼は、共訳者の口述翻訳を聞きながら古文を用いて筆記した。これが林紘の翻訳方法だ。その結果はどうなるか。

林紘は他人に原著の選択をまかせたため、多くの23流の作品を翻訳して貴重な時間を浪費した。その訳文には多くの削除、誤訳、加筆などが行なわれている。ときには、もとのすばらしい脚本を小説

に翻訳してしまった。有名な例は、シェイクスピアあるいはイプセンの戯曲を小説化したことだ。

これが、研究者のだれもが認める林訳の欠陥である。

その評価が、結果的に正になるにせよ、負になるにせよ、林訳に以上の欠陥があることを認めるのが前提となっている。逆にいえば、事実として欠陥があると把握したうえで、正負に評価を定める。これが林訳評価の基本的な構造である。

林訳小説に欠陥があることは、1910年代に劉半農が指摘し、胡適が追認した。林紓批判のひとつだ。彼の存命中である。1920年代、林紓の死後、鄭振鐸がそれを確定して決定的なものにした。

以後、林訳評価の構造 = 枠組みは、例外のひとつもなく維持され続けて現在にいたっている。

いま、林訳評価の枠組みはもとのままで、評価を正の方向に極端に推し進めた論文が出現した。郭延礼は、林訳小説評価についての新しい視角を提案するのだ。本稿では、彼の論文をとりあげて紹介する。

郭延礼の提案

林訳小説について、郭延礼は、従来から一貫して正の側面に重点をおいて高く評価している。林訳に欠陥はあるにしても、結局は価値のある翻訳だと認めているのだ。

たとえば、「“林訳小説”的総体評価及其影響」(『社会科学戦線』1991年第3期(総

第55期)1991.7.25。のち、『中西文化碰撞与近代文学』(済南・山東教育出版社1999.4所収)、あるいは『中国近代文学発展史』第2巻(済南・山東教育出版社1991.2/北京・高等教育出版社2001.7)がある。さらに、翻訳研究の専門書である『中国近代翻訳文学概論』(漢口・湖北教育出版社1998.3/修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷)などである。

大部の著作を世に問い続け、林訳小説のはたした役割に高い評価をゆらぐことなくあたえているのは、まさに注目にあたいする。

ところが、郭延礼は、それだけでは不十分だと感じたらしい。正の方向での評価を極端に推し進めたのが、つぎの『20世紀中国近代文学研究學術史』(南昌・江西高校出版社2004.12)だ。同じ文章を『中国前現代文学的轉型』(済南・山東大学出版社2005.10)に流用している。それほど強調したいことだと私は理解した。本稿では、後者にもとづいて述べる。

該書の「第十一章 福建人文与中西文化交流」において、郭は、翻訳界の巨星ふたりを取り上げる。嚴復と林紓だ。両者ともに福建人である。片方の林訳小説に関して、以下のように説明している。

「林紓翻訳の評価について、過去において私たちは原文と対照すること、すなわち原文への忠実さに拘泥しすぎた。人々は往々にして林紓の翻訳に誤りと削除があることをもってその主要な欠点とし、はなはだしくはそれにより軽率にも林紓の翻訳を否定する人もいた」188頁

林訳を評価するとき、原文と対照することに拘泥しすぎた、と郭延礼はいう。林訳に誤訳、削除などがあることを認めるのは従来通りだ。だが、今回は、発想の転換を提起する。これが新しい。

「その実、林紘の翻訳については、私たちは視角の転換を行なってさしつかえない。すなわち「原著中心論」の束縛を打破しなければならない。いわゆる「原著中心論」とは、翻訳を原著の複製品だと見なすことだ。翻訳を受け身の、副次的な、創造性のない執筆活動だと見なすことだ。ゆえに過去において、人々は往々にして原著のなかのある文章、はなはだしきに至ってはある単語、ある字について細かく比較して訳し間違いだといひ、また、それによって翻訳の善し悪しを判定した。これは非常に時代遅れの見方である。20世紀全体において、林紘の翻訳に対する批判は、基本的にこの観点から出発してもたらされたものだった。/ 今日、私たちは新しい視角に変え、新しい翻訳批評の基準を導入しなければならない。これこそが「訳文を中心とする」という翻訳観である。いわゆる「訳文を中心とする」とは、翻訳を主体的な、独立した、創造性の仕事だとみなすことだ」189頁

「林紘の翻訳は、原著に対するある種の再創造なのである」同頁

「……林紘の翻訳には確かに削除、加筆があることを私たちは承知している。しかし、林紘の削除、加筆は随意にでたために行なわれたものではなく、彼の原

文の削除には目的があった。すなわち、清末の伝統的な鑑賞習慣にあわせるためであり、さらに多くの中国人読者に受け入れやすくするためであったことを説明しなければならない」190頁。

郭延礼が提起しているのは、翻訳はすなわち再創造である、という新しい視角だ。ヴァルター・ベンヤミンとデリダの名前をあげて、それらの著作からの導入を表示する。

郭は林紘の名前しか掲げていない。しかし、それだけにはとどまらない。翻訳研究全体にかかわってくる。

翻訳者の使命という課題を考えるとしよう。原作と翻訳をオリジナルとコピーの関係である、と見なさない。ここまででは、わかる。郭延礼が説明する次の部分が問題だ。すなわち、「訳文を中心とする」と書いて翻訳を原作から切り離す。はたして、それは妥当なのか。この部分の解説がないから理解するのがむづかしい。

郭延礼は、上に引用した以上に詳しく説明しているわけではない。すぐれた翻訳の例をいくつか紹介してその根拠にする。たとえば、ハガードの英文よりも林訳が優れているという錢鍾書の説明とか、ディケンズの原文よりも林訳がよいという謝冰心の文章を紹介する。あるいは、島田健次[謹二]が森欧[鷗]外の翻訳したアンデルセン『即興詩人』について原文に手を加えていることをいう(固有名詞をなぜか間違う。単なる誤植だろうが、大丈夫かと心配になる)。それだけだ。

正直なところ、私は驚いた。同時に、ある違和感をいだき、また、不安を感じる。郭延礼が、林訳を正の方向で今までより強力に評価したいがため、従来の翻訳研究を否定しているのではないかと読みとれるからだ。

再創造ということ

郭延礼は、翻訳は再創造だと書く。再創造という視角で林訳小説を評価しろという。

私がいだく違和感は、たぐっていくと「再創造」ということばから発生している。

あの著名な「電術奇談」について、「再創作」ということばをいまだに使用する研究者がいる。それを連想するから、私はなにかうさんくさいものを感じる。

菊池幽芳氏原著、方慶周訳述、我仏山人(呉趼人)衍義、知新主人(周桂笙)評点「電術奇談」24回という作品がある。『新小説』第8号-第2年第6号(第18号)(光緒29.8.15-刊年不記[光緒31.6](1903.10.5-[1905.7])に連載された。探偵が登場する恋愛小説だ。発表されると、中国では大きな評判をよんだ。単行本が複数出版されるばかりか映画にまでなっている。

菊池幽芳原作と表示がある。だが、長い間、中国ではその原作を特定することができなかった。日本人の原作だから調査の手がおよばなかったのだろう。その結果、中国の研究者はなにをいいはじめたか。呉趼人が「再創作」したもので

ないか。いや、そうに違いない。実は呉趼人が再創作した作品なのである、という結論にしてしまった。原作が不明だから、想像はふくらむばかりだ。

私が菊池幽芳「新聞賣子」75回を新聞紙上に探しあてたのは1985年のことだった。日本文と漢訳を比較検討すると、少しの加筆はほどこしているが原作の大筋に忠実な作品であることが明らかになった。しかし、中国では現在にいたるまで呉趼人の再創作だと説明するものがある。「実は創作であり、翻訳と見ることはできない」などと書く文献が公表されるしまつた。では、再創作の中身を考察した論文が発表されるかといえば、それもない。論証ぬきで結論だけが下される。

日本で発表された原作を中国で調査することは困難かもしれない。しかし、その努力はすべきだった*1。詳細は知らないが、収穫がなかったのは確かだ。その結果、いとも簡単に「再創作」と断定した。今でも変わらない。それこそ、原作から切り離れた「訳文を中心とする」評価方法の先例となるのではなからうか。

私が不安を感じるのは、林訳小説についても同じことにならないか、と思うからだ。原作との関係を検討することなく、翻訳作品だけを中心に研究すればよいということになりかねない。これははたして翻訳研究といえるだろうか。

結 論

翻訳を再創造だと郭延礼が考えるのはかまわない。だが、くり返すが、その

あい翻訳と原作の関係を断ち切っているのではないか、と私は疑うのだ。ここは研究の問題になる。

翻訳と研究というふたつのものを郭延礼は同一視しているのではないかと危惧する。なにしろ彼の文章には、研究者の使命は書かれてはいないのだ。

翻訳は、再創造、再創作だという。「訳文を中心とする」ことを強調することによって、もとの拠った原著との関係を極めて希薄なものにしてしまう。原著はヒントを与えただけの存在になりかねない、と想像もする。推し進めていくと、原作についての考察は必要でなくなる。あるいは原作不明の翻訳については、原作探求は重要ではない、必要ではない、と短絡する恐れがある。これが中国における翻訳研究の将来について私が感じる不安なのだ。

翻訳の際に底本とした原作の特定をする意味も価値も必要もないことになるとしよう。すると、原作の外国語に言及する理由もなくなる。再創造なのだから、今目の前にある作品そのものだけを研究すればよい。従来の翻訳研究にまわりついていた外国語という大きな障壁を無視してよろしいという提案にほかならない。漢語だけを読んでいればいい。私にいわせれば、これはもはや翻訳研究ではない。

林訳小説は、まだましな方だ。清末民初時期に出現した膨大な翻訳作品のなかには、原作名、原作者名を明記しないものも多い。そのようなことはないとは思

うが、郭延礼は、ひとつひとつの作品について、それらの原作を探索することに疲れてしまったのか。それとも、最初からその興味がなかったのか。だから、外国の理論に飛びついたのか。それがそのまま中国の近代翻訳小説研究にも適用できると考えたのか。とても、『中国近代翻訳文学概論』という大著を執筆した人とも思えないほどの、極端でいかがかと思われる提案だと私は思う。少なくとも、研究者の役割について詳しく説明する必要があるのではないかと、ともつけ加えたい。



【注】

- 1) 「電術奇談」の原作「新聞賣子」について、私に直接、問い合わせてきた人数を示せば、関心がほとんどないことが理解できる。すなわち、今までの約20年間に、複写を求めた研究者は韓国と中国からひとりずつ、合計ふたりだけだ。日本語で書かれているのが問題なのかもしれない。ここに翻訳研究のむつかしさがある。

樽本論文補遺 3 題

沢本香子

阿英『晚清小説史』台湾版について

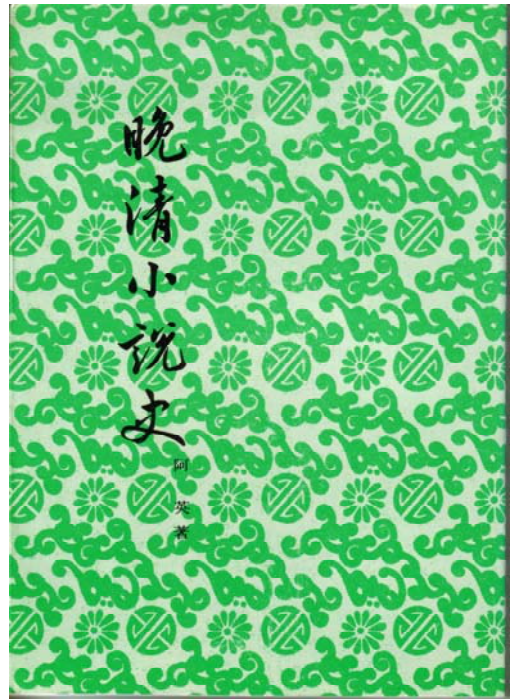
樽本照雄編『阿英『晚清小説史』ほか索引』(清末小説研究会2007.2.1 清末小説研究資料叢書10)が出た。そのなかに台湾版『晚清小説史』2種類が紹介されている。実は、台湾ではもう1種類が出版されているのでお知らせする。

台湾・天宇出版社版(1988.9)だ。これは、香港・太平書局版(1966.1)あるいは香港・中華書局香港分局版(1973.6)をそのまま影印したものだ。なぜそれがわかるかといえば、阿英の改訂版説明文にある「為蔣匪」を削除しているからだ。この削除が香港影印本の特徴だ。

つまり、台湾では、合計3種類の阿英『晚清小説史』が出版されたことになる。

上海・商務印書館の初版を影印したもの(ただし削除あり)、初版をそのままに組み直したもの、および訂正を取り入れた香港版を影印するものである。

台湾でもくりかえし重版されるのは、それだけ需要があるということだ。



阿英『晚清小説史』台湾版

林紓「論古文之不宜廢」について

林紓「論古文之不宜廢」は、樽本「林紓を罵る快樂(2)」(『清末小説』第29号2006.12.1)の冒頭に追加説明がある。『民国日報』に再録されたのであって、初出は不明という。

初出については、すでに指摘がなされている。洪越「五四文学革命的另一方面——以林紓为中心」(『現代中国』第2輯2002.3.155頁)である。林紓の該文は、天津『大公報』1917年2月1日付に掲載された。洪越は注して、1917年2月8日付『民国日報』に転載されているが、その説明はない、とも。

初出の複写を入手したので掲げる。

「特別記載」とあって特別扱いになっている。また、林紓の肖像写真が掲げられているのも珍しい。本文中のある字句が大

特別記載

(内外各報有轉載本欄記載者請查明係由本報轉錄)

論古文之不宜廢

林琴南

文無所謂古也唯其是願一言是則造者愈難漢唐之藝文志及崇文總目中文家林立而何以馬班韓柳獨有千古然則林立之文家均不是唯是此四家矣顧尋常之牋牘簡牘率皆行之以四家之法不惟伊古以來無是事即欲資之以是亦率天下而路耳吾知深於文者萬不敢其設爲此論也然而一代之興必有數文家摯摯於其間是或一代之元氣盤礴鬱積發洩而成至文猶大城名都必有山



水之勝狀用表其靈淑之所鍾文家之發顯於一代之間亦正類此嗚呼有濟往矣論文者獨數方姚而攻培之者靡起而方姚卒不之替或其文固有其是者存耶方今新學始昌即文如方姚亦復何濟於用然而天下講藝術者仍留古文一門凡所謂載道者皆屬空言亦特如歐人之不廢臘丁耳知臘丁之不可廢則馬班韓柳亦自有其不宜廢者吾識其理乃不能道其所以然此則嗜

古者之病也民國新立士皆剽竊新學行文亦澤之以新名詞夫學不新而唯詞之新匪特不得新且舉其故者而盡亡之吾甚虞古系之絕也向在杭州日本齊藤少將謂余曰敵國非新蓋復古也時中國古籍如陌宋樓之藏書日人則盡括而有之嗚呼彼人求新而惟舊之寶吾則不得新而先殞其舊**意者後此求文字之師將以厚幣聘東人乎**夫馬班韓柳之文雖不協於時用固文字之祖也嗜者學之用其淺者以讓入轉轉相承必有一二鉅子出肩其統則中國之元氣尙有存者若棄擲踐唾而不之惜吾恐**國未亡而文字已先之幾何不爲東人之**

所笑也

文字で組んである。そこに「東人」が含まれており、中国人の注目を引くための工夫なのだろう。日本人の私としては、なにか居心地がよるしくない。

カッコのなかには、転載するならその旨をはっきり書いてほしい、と明記されている。それにもかかわらず、守られなかったようだ。『民国日報』には、天津『大公報』の表示はなかったからだ。

それにしても、林紘資料の専門書に、なぜ該文が未詳になっているのか。文章の題名を間違えて、長らく踏襲されてきた。

問題は、ふたつある。

ひとつは、胡適以外には誰も林紘の該文を直接引用していないこと。当時の知識人にとって天津という土地は、意識の上で北京から遠くはなれていたのだろうか。

ふたつ目は、研究者の問題だ。長く探索が行なわれていなかった。まさかとは思うが、批判された林紘の文章は、探索する価値がないとでもいうのか。2002年まで文章の掲載についての記述が不明瞭であった理由がわからない。

アラビアン・ナイトの翻訳者奚若

樽本照雄『漢訳アラビアン・ナイト論集』(清末小説研究会2006.6.1)の誤植については、清末小説研究会のホームページに訂正が掲げられている。

翻訳者の奚若が問題だ。

奚若は伍光建だ、と教えて下さる外国の研究者があった。該書では、張奚若ではなく、伍光建でもなく、ましてや周桂

笙でもないと書いているにもかかわらずだ。日本語を理解しない人だからしかたがない。いまにいたるまで、伍光建説は根強く信じられているとっていい。

奚若は、商務印書館の理事に就任している。その関係からか、商務印書館につとめていた陳応年が奚若について文章を書いているのを知った。陳応年「奚若、一位被人們遺忘的翻譯家」(『中華讀書報』1999.7.14未見)という。

文軍主編『中国翻譯史研究百年回眸 1880-2005中国翻譯史研究論文、論著索引』(北京航空航天大学出版社2006.7.111頁)に題名が収録されているのを私は見たのだ。該文そのものは読む機会がない。「摘要」を見ると、奚若は伍光建の筆名では決してない、当時、高級編集者であった、と書いてある。題名通り、忘れられた存在なのかもしれない。だから、別人の筆名だと誤解されている。

もうひとつある。

謝天振、查明建主編『中国現代翻譯文学史(1898-1949)』(上海外語教育出版社2004.9)に奚若の項目がもうけてあるのは珍しい(68頁)。商務印書館編訳所に勤務していた、とある。 ☐

阿英『晚清小説史』ほか索引

B5判 98頁 限定200部 定価：2,100円

本書に収録するのは、以下の索引です。

阿 英『晚清小説史』(1991年版)

欧陽 健『晚清小説史』(1997)

韓 南『中国近代小説的興起』(2004)

樽本照雄『清末小説研究集稿』(2006)

『漢訳ホームズ論集』

清末翻訳小説研究が進まない理由2

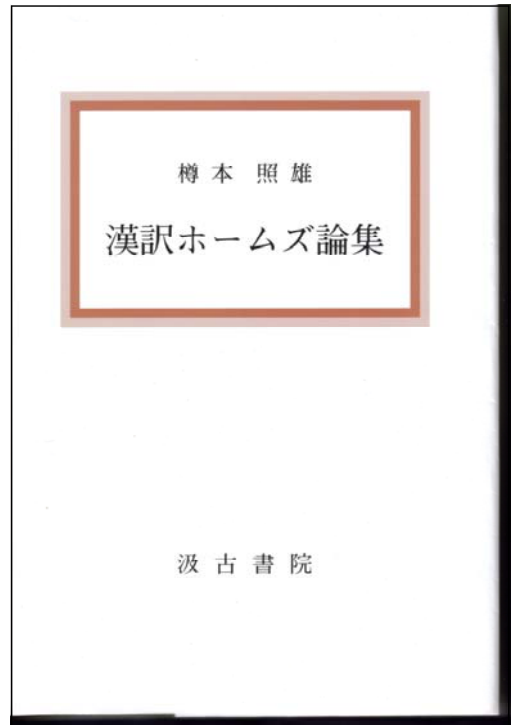
樽本照雄

清末民初翻訳小説の研究手法、といっても特別なものは、ない。漢訳本によった底本をさがし、原本と訳本の本文を比較対照する。それだけのことが、なかなか順調にはすすまない。

ひとつは、現在とは異なり、当時の文芸界の習慣として原著者、原著書を明記しない作品があるからだ。原著書がわかったとしても、たとえばロシア文学のばあい、はたしてロシア語から直接翻訳したかどうかは調べてみなければわからない。英訳本によった重訳の可能性もあるからだ。翻訳小説研究には、解決すべき一般的な問題は少なくないのだ。

ただし、コナン・ドイルが創造したシャーロック・ホームズ物語については、迷う部分はそれほど多くはない。迷うより前に、日本では原物そのものが不足している。資料不足は承知の上で研究するのだろう、といわれそうだ。確かにそうだが、ないものはない。

あれほど盛んに出版されたホームズも



の漢訳だった。だが、当時のこの訳本を所蔵する機関は、日本にはほとんど存在しない。総合目録データベース(NACSIS Webcat)で検索すれば、1970年代以降のホームズ作品を所蔵する図書館はある。私は、後代の書物をいっているのではない。約60年以前の書物を読みたいといっているのだ。これが簡単ではない。中国で繁栄したとはいえ、翻訳でしかも探偵という大衆小説(中国語では「通俗小説」という)だったからなのだろうか。それをいうなら、商務印書館の「説部叢書」も「林訳小説叢書」も同様に所蔵されてはいないが。

ホームズ物語を研究するばあい、「緋色の研究」(習作という訳語はとらない)ははずすことのできない作品だ。中国では、訳者をかえて複数が出版された。そのひ

とつを『^{シャーロック}歇洛克奇案開場』という。関係論文では、必ずその書名が出てくる。だから、中国ではありふれた版本なのだ、と私は思った。

私がドイル研究に着手してからのことだ。探しても日本ではこの重要版本を読むことができない。しかたなく、該漢訳の複写をほしい、と中国の専門家をお願いした。その研究者は、近代翻訳文学概論の専著を執筆している。自著にその漢訳書名を書き込んでいるから所有しているだろう。所蔵しないまでも少なくとも読んでに違いない。だからこそ依頼をしたのだ。すると、見ていない、と意外な返答であった。これには驚いた。書名を掲げる(重要作品だから当然なのだ)が、漢訳原本を見ることができないという悲劇的状况が、実際にある。翻訳小説研究における資料不足が深刻であることを、いまさらながら確認することになった(後日談。該当の漢訳本は、別の経路で複写を入手した。それにもとづいて私は論文を書くことができたのだ。さらに日を経て、こんどは原書を購入する幸運にもめぐまれている。著書のなかに書影を掲げた)。

ホームズ物語は、評価の面において中国では悲惨な運命に遭遇してしまった。アラビアン・ナイトに比較して、とつけ加えてもいい。十字砲火どころかさらに空爆に見舞われるのである。使用する用語に違和感をもたれるかもしれない。だが、中国では、実際に文字通りに近いことが行なわれた。誇張ではない。

なにをどのように研究しても自由であ

る。こう考える日本の読者に、中国の研究状況を説明するのは骨がおれる。説明したとしても、理解されるかどうかいつも不安を感じる。

コナン・ドイルのホームズものが中国の学界で冷遇どころか強く批判されるのは、低俗である、という理由だからだ。何に比較して「低俗」なのか。その国の第1流の文学とくらべると34流なのだろう。私がそうしているわけではない。中国の研究者が、翻訳目録を編集するとき、ハガード、ドイル、ルブランらを名指しして目録から排除した。これが1920年代の中国であった。目録から追いつく徴候は1910年代の林紓批判に始まっていた。逆にいえば、低俗だと排除したくなるほど一般の読者からは歓迎されたということだろう。事実、その翻訳はおびただしい量で発行された。ドイルのホームズ物語など、複数の全集、選集が出版されてもいる。当時、日本で盛んに出版され読まれたのと遜色はない。作品によっては日本語訳本よりも中国の方で先に漢訳されたものもある。

それほど隆盛を誇ったドイルのホームズ物語であったにもかかわらず、なぜ、中国の学界では攻撃目標にされたのか。

結論をいえば、1910年代からはじまった文学革命路線の擡頭が原因だ。自らの正統性を主張するためには、直前から目前の文学現象を批判するのがいちばん手っ取り早い。すなわち、清末小説を批判し、流行している大衆小説を批判する。自分たちの革命文学を称賛しつつける。

敵だと認定し目標とさだめた対象を徹底的に批判することによってのみ自分たちの正しさを保証することができる。そう考えるのだ。あからさまにドイル一派の小説は翻訳するな、と主張している事実がある。

ここまでは、どこの国でも普通に発生する現象だ。論争が起こり、継続される。ただし、一般に大衆小説側の著者翻訳者は、反論しない。多数の読者が支持してくれているという自負があるからだ。

だが、中国では状況が違った。1949年の中華人民共和国成立後、革命文学派が勝利したと考えるのが主流だ。これが唯一正当なものだと認知される。こうして文学史の洗い直し、書きかえがはじまる。革命文学派を中心にしてすべてが動いていたと歴史を再構成し、それにそった文学史を記述するのだ。革命文学側が当時から敵視した大衆小説に対しては、基本的に徹底して批判する、軽くて無視する。当然、ホームズ物語もそれに含まれる。中国において大流行したことがある分、目の敵にされた。「文革」前から、作品そのもの、翻訳者までも翻訳をしたというだけで根こそぎ批判されたというわけだ(中国で使用される批判という言葉の持つ重みは、日本ではたぶん理解することができない)。

その結果、なにが起こったか。最悪の評価に影響されて上に述べたような資料の不備を招来したのである。

最近、ホームズものに対する扱いはいくらか変化してきた。しかし、大衆小説、中国でいう「通俗小説」についての研究

は、研究者自身の腰が引けている。大衆小説に対する軽視の姿勢が無意識にあらわれるらしい。中華人民共和国成立後60年にも満たないが、意識の深部に確立されていると思われる。

私は、漢訳ホームズの受難史をたどって「漢訳ホームズ研究小史」を書いた。また、入手できるかぎりの英文原書と複写であれ漢訳原書を手元において、ドイル作品の一つひとつについて漢訳の質を検討する作業を長年にわたって継続している。翻訳の実情を文章にそって吟味したそれらの論文のなかから、漢訳ホームズ関係だけを集めて『漢訳ホームズ論集』(汲古書院2006.9)が成った。

というわけで、私の『漢訳ホームズ論集』は、『漢訳アラビアン・ナイト論集』とともに漢訳を主題とした単行本としては世界で最初の専門研究書という栄誉をになうことになったのである。中国ではなく日本で実現したという事実は事実として率直に認めてほしいものだ、と小声でいう。 □

『劉鶚集』が出版されるという。劉鉄雲全集である。劉徳隆氏からの連絡によると以下のような構成になる。

河工類、算学類、医薬類、文学類(小説、詩詞)、抱残守缺齋日記、劉鶚書信電文類、劉鶚稟稿啓事類、劉鶚批注題跋類、古文字類、音楽類、其它類ほか。

活字で起こした部分と影印版との混合であるという。文字通りの全集である。

晚清小說作者掃描(拾)

武 禧

(零四二)

飲霞居士

小說創作《熙朝快史》、《異想天開》

飲霞居士：“飲霞居士”應為作者筆名，姓氏不見任何著錄，生平待考。僅有《熙朝快史·序》可了解他對小說的一些見解。他對小說的創作的體會是“小說豈易言者哉！其為文也俚，一話也必如人，初脫諸口，摹繪以得其神；其為事也瑣，一境也必如身歷其中，曲折以達其見”。對於小說作者，他以為“非胸羅數百輩人物之譜，歷數十年之世故，則嘻笑怒罵，一事有一事之情形；貞淫正邪，一人有一人之體段”。對於當時小說的現狀，他的評價是“且夫進所謂小說者亦夥矣。非淫詞艷說，蕩人心志，即抄襲雷同，厭人聽睹。欲求其自抒心裁，有關風化者，蓋不數數構矣”。飲霞居士對自己創作的小說《熙朝快史》的評價是“言雖近而旨遠，意雖奇而詞正”。

《熙朝快史》出版於光緒二十一年，書中提及“改科舉、修學校”等都與當時

社會生活緊密相關。

飲霞居士又有小說《異想天開》。一說《異想天開》即《熙朝快史》同書異名而已，惜未見原書，錄此以待研究。

(零四三)

梅癡生

小說創作《玉燕姻緣全傳》

梅癡生：作者姓字生平不見任何著錄。此書序作者“滄北俗子”亦不見著錄。現見《玉燕姻緣全傳》或題作者為“無名氏”。

此書《序》云“坊友攜《玉燕金釵》祕本至”。知書名又有《玉燕金釵》一說。此書《序》之落款為“滄北俗子識於容膝居，鴛湖梅花居士呵凍於海上寄廬”應知此書《序》作者並非一人。

(零四四)

吳興於茹川

小說創作《玉瓶梅》

吳興於茹川：關於這一作者姓名，可有三解，試述如下：

1、按照一般的規律，這裏的“吳興”應做地名解。因此，可解釋為“吳興人氏，姓於，名茹川”。吳興，古地名，《辭海》等對此都有其沿革的介紹。現在湖洲市的一個區。

2、但《玉瓶梅》的作者署名為“吳興於茹川作”。可以解釋為吳興(人名)，“在”“茹川”(地名)創作。也就是：姓“吳”，名“興”者在“茹川”創作。茹川，地名。《辭海》等無解。但在《唐書》中有“贊普牧馬茹川”

一説。可見“茹川”確是一個地名。

3、姓“吳”，字“興於”，名“茹川”(或字“茹川”，名“興於”)。

以上三解無論正確與否，查閱多種資料，均無有關作者情況的綫索。此書作者署名之后綴一“作”字，也與其它著作不同。故求教於諸方家。

(零四五)

正一子 克明子

小説創作《金鍾傳》

正一子 克明子：兩作者都未見於任何著錄。生平待考。從作品語言分析，應為天津人所撰寫。就其作者姓名，析其含義：

《金鍾傳》一書，署作者二人，其含義實在是一個。正一，取其純真。克明，能察是非。和在一起為“正一克明”，純正明了的意思。《金鍾傳》一書又題“正明集”。此取第一作者的第一個字和第二位作者的第二个字。“正明”實在是“正大光明”的意思。由此可知正一子、克明子兩人只是用署名表達做人應有之品質，並非作者真實姓名。

(零四六)

遭劫余生

小説創作《掃蕩粵逆演義》

遭劫余生：浙江寧波人，姓崇，號醴泉居士，筆名：遭劫余生。有一子名猷、一姪名熙、一甥名禮焉，皆粗通文墨。其余未見任何著錄。《掃蕩粵逆演義》又名《湘軍平逆傳》有“勾章醴泉居士著，姪崇熙摹，子崇猷撰，甥禮焉校”。“勾章”，

古已有之，為現代浙江寧波一帶。因此遭劫余生應是寧波人。

(零四七)

吳毓恕

小説創作《仙卜奇緣》

吳毓恕：無任何可分析資料。待考。

(零四八)

抽絲主人

小説創作《海上名妓四大金剛奇書》

《海上名妓四大金剛奇書》署名為“抽絲主人”，然“抽絲主人”究竟何許人也？目前學界認識並不一致。一沿舊說以為“抽絲主人”就是吳趸人，一持疑義說，以為另有一個“抽絲主人”。持前說者為文壇新秀河南大學胡全章，文見《傳統與現代之間的探詢——吳趸人小説研究》(河南大學出版社2006年5月)；持疑義者為研究宿將長春師院郭長海，文見《中國近代文學史證——郭長海學術文集》(吉林人民出版社2005年3月)。新秀老將，各執一詞，孰是孰非，尚無定論。筆者只能將此題目暫時擱下，俟有下文，再行補敘。 ☐

清末小説から

李 曉杰 范約翰主編的《小孩月報》首期新探 『或問』第10号2005.11.30

李 慶国 梁啓超的《新中国未来記》与日本明治時期的未来記小説 『追手門学院大学文学部紀要』第41号 2005.12.30

- 阿 英 “克雷洛夫寓言” 最早介紹到中国来的俄羅斯文学名著 『阿英全集：附卷』合肥·安徽教育出版社2006.5
- 沈 国威 黄遵憲の日本語；梁啓超の日本語 『或問』第11号2006.6.30
- 夏 曉虹 『閲読梁啓超』北京·生活·讀書·新知三聯書店2006.8
- 鄒 振環 (第3章) 晚清広州の外語教育与外語読物 郭秀文等著 『清代広州与西洋文明』汕頭大学出版社2006.9
- 柳 和城 《新劇雜誌》 中国話劇第一刊 『出版史料』2006年第3期(新総第19期)2006.9.25
- 韓 琦 張秀民先生和中国印刷史研究 張秀民著、韓琦増訂 『(挿図珍藏増訂版)中国印刷史』杭州·浙江古籍出版社2006.10
- 潘 光哲 開創“世界知識”の公共空間：《時務報》訳稿研究 『史林』2006年第5期2006.10.20
- 王 振忠 徽商章回体自伝《我之小史》の発現及其学術意義 『史林』2006年第5期2006.10.20
- 中村みどり 『留東外史』と武俠小説 『中国文芸研究会会報』第300期記念号(297-300期合併号)2006.10.29
- 潘 建国 鉛石印刷術与明清通俗小説の近代伝播 以上海(1874-1911)為考察中心 『文学遺産』2006年第6期2006.11.15
- 錢鍾書著、中島長文訳 林紓翻訳(上)
- 『飄風』第41号 2006.11.15
- 樽本照雄 陳薇監訳 『清末小説研究集稿』濟南·齊魯書社2006.8
- 『漢訳ホームズ論集』汲古書院2006.9
- 長尾雨山と上海文芸界 『書論』第35号2006.10.1
- 『商務印書館研究論集』清末小説研究会2006.12.15
- 『阿英『晚清小説史』ほか索引』清末小説研究会2007.2.1
- 清末小説研究資料叢書10
- 『明清小説研究』2006年第3期(総第81期)2006発行月日不記
- 晚清《新聞報》与小説相關編年(1893-1895) ……陳 大康
- 晚清“皇后系列小説”述略……薛 洪勳
- 《盛京時報》近代小説概況……宋 海燕
- 『現代中国』第7輯 2006.6
- 梁啓超曲論与劇作探微 ……夏 曉虹
- 海上新伝奇 從韓邦慶《海上花列伝》看19世紀末葉上海城“現代性”面貌的成熟与轉型 ……呂 文翠
- 新聞生産中の小説伝統 以早期《申報》文人对《聊齋志異》の接受和転化為例 ……李 彦東
- 【書評】重建学術史的“意境” 評陳平原《触摸歴史与進入五四》 ……陳 曉明
- 【書評】重繪中国近代小説史の地図 評韓南《中国近代小説の興起》 ……張 治

- 【書評】晚清小説研究の現代視角 評 研究》一書 ……劉 召興
王德威《被圧抑の現代性 晩清小説新論》 ……李 静
- 【書評】描述灰色的地帯 読楊聯芬
《晩清至五四：中国文学現代性の発生》 ……龔 是非
- 【書評】中国近代文学学科史の最新清理
評《20世紀中国近代文学研究学術史》 ……樂 偉平
- 【書評】在伝統与現代性之間 評介
《新文化的伝統 五四人物与思想
- 【書評】周氏兄弟与現代中国 《文学復古与文学革命 木山英雄中国現代文学思想論集》 ……崔 問津
- 【書評】詩学視野与在地關懷下的文学史研究 評陳国球《文学史書写形態与文化政治》 ……彭 春凌
- 【書評】作為世紀新發現的俗文学《現代学術史上的俗文学》書評 ……王 曉白

樽本照雄著

清末翻訳小説論集

A5判 上製 箱入り 414頁 限定150部 定価：8,400円

清末に発表された翻訳小説についての論文集です。周氏兄弟が学生時代に翻訳した作品のいくつかを紹介します。コナン・ドイルの作品は、ホームズものだけではありません。漢訳されたホームズもの以外の作品、あるいはそれに触発されて書かれた贋作ホームズについても紹介しています。アディソン、ゴールドスミス、トルストイらの漢訳ほか。

【内容目次】

「航海少年」は魯迅の翻訳か / 魯迅「斯巴達之魂」について / 魯迅「造人術」の原作 / 魯迅「造人術」の原作・補遺 英文原作の秘密

漢訳ドイル「荒磯」物語 山縣五十雄、周作人、劉延陵らの訳業 / 漢訳ドイル「サノックス卿夫人事件」3種 / 漢訳ドイル医者物語 包天笑+張毅漢、周瘦鵑らの訳業 / 贋作ホームズ失敗物語 陳景韓、包天笑から劉半農、陳小蝶へ / 贋作ホームズ『黄金骨』の場合

清末翻訳2題 / 包天笑翻訳原本を探求する / 「航海少年」原作探索 / トルストイ最初の漢訳小説 「枕戈記」について / ポー最初の漢訳小説 周作人訳『玉虫縁』について / 漢訳ハガード小考 / アディソンの漢訳小説 / ゴールドスミス最初の漢訳小説